

〔こどもの城〕 造形スタジオの 造形遊び

造形スタジオでは、〔こどもの城〕に遊びにくる年齢の異なるさまざまな子どもを対象に、造形遊びのプログラムを実施しています。同年齢の子どもや特定の人数に限定することなく、いつでも、だれでも参加できるようになっています。

1985年（昭和60年）の開館当初から、子どもたちが主体的に参加できるよう、“見る”“触る”“聞く”“嗅ぐ”などの五感に訴える体験と制作活動を総体的にとらえた、〈展示〉〈体験〉〈制作〉の3つを構成要素とする「ワークショップ」を行っています。

〈展示〉〈体験〉〈制作〉

遊びに来た子どもたちは、〈展示〉をとおして初めて〔こどもの城〕の“造形遊び”と出会います。テーマに応じて、スタッフやアーティストが制作したオブジェや作品、実物資料、映像資料などを、子どもたちの制作意欲をかきたてるように、造形スタジオへのアプローチやスタジオ内に展示します。子どもたちは主に、視覚的な“探索体験”をとおして、テーマ、素材、色彩、形、技法、モチーフ、アイデアなどの造形的な要素を探ります。

〈展示〉が視覚による体験であるのに対し、〈体験〉は主に触覚による体験をうながす場です。テーマに関連した内容や素材、ときには〈展示〉の作品などを子どもたちが実際に手を動かし、触り、遊び、確かめてみるという空間です。例えば、手で折る、曲げる、破るなどの行為を試みて、積極的な制作や活動へとつながっていく“動機づけ”の場です。

〈展示〉と〈体験〉という、視覚と触覚の体験によって、一人ひとりの子どものなかのイメージがより明瞭になり、制作意欲や計画性が生まれます。つまり、“見て”“触って”“聞いて”“感じて”“試して”きた体験から、イメージをふくらませて、手を動かし、頭を使って、具体的な“かたち”にしていく〈制作〉にとりかかります。それが、一つのものを作り上げる過程を経験することなのです。

3つの造形活動

造形スタジオは、3歳ぐらいから高校生まで、幅広い年齢の子どもたちが利用します。スタジオの環境設定や表示は、だれもが理解できるように、視覚に重点を置いた“ビジュアル・インフォメーション”が重要になります。

子どもたちが、活動のねらい、素材の特性、道具の使い方、制作方法などを理解できるように、分かりやすく統一感のある表示を心がけています。視覚的に訴えることで、子どもたちは直感的に、「おもしろそうだな」と興味を持ちます。そこから、子どもたちの造形活動が始まり、さまざまな〈体験〉や〈制作〉をとおして、「おもしろかった」という実感となって子どもたちの心に残ります。

造形スタジオで行われている造形活動は、①一般来館児活動 ②こどもクリエイティブクラブ ③グループ活動の3つに大きく分けられます。

●一般来館児活動

〔こどもの城〕が開館しているときに、造形スタジオを訪れば、だれでも随時参加することのできる造形活動を「一般来館児活動」と呼んでいます。年齢の異なった子ども、近隣の子ども、遠くから遊びにきた子ども、偶然に通りが

かった子どもなど、さまざまな背景をもった子どもたちが来館し、積極的に造形活動に参加できる場となっています。

「一般来館児活動」プログラムには、おおむね3歳以上の親子や子どもを対象にした「親子コーナー」（開館時間中随時）のプログラム、素材の種類や技術的な難易度などによって年齢制限を設ける（小学生以上）、子どもだけが参加できる「クリエイティブコーナー」（土・日曜日、祝日と夏休みなどの特別期間に開設）のプログラムがあります。これらのプログラムは、約3週間のサイクルで変更しています。

造形スタジオで実施しているプログラムは、“ひかり”“紙”というような“大きなテーマ”を設定して、それをさまざまな角度からとらえて、一つひとつのプログラムへと展開しています。1年から2年をかけてプログラム内容を検討し、いろいろな試みを繰り返し、その集大成として企画展の開催へと結びつけるという、段階的に活動しています。これは、計画的なプログラム開発と実施のための方法でもあります。

企画展は主に、春休み、夏休み、冬休みの長期の学校休みの期間に実施しています。試行を繰り返し、時間をかけて練り上げてきた、共通するテーマをもった造形遊びプログラムの集大成とも言えるものです。

1年＝約52週のなかで、約3週間ごとに新しいプログラムを実施するためには、年間に「親子コーナー」「クリエイティブコーナー」のそれぞれで、17のプログラムを開発・実施しなければなりません。毎回、新しいプログラムを単独で開発していくことは大変な作業ですが、“大きなテーマ”を設定することで、多角的にプログラムを開発することができ、材料や機材なども効率的に運用することができ

ます。新しいプログラムは、プログラム同士の関係性や系統性を見て、約3か月を一つの単位として、その内容を決めて実施していきます。プログラムによっては、ねらいとしたことと子どもたちの反応にズレが生じたり、子どもの能力や経験値に対して要求する事柄に過不足が見られる場面もあります。これらは、プログラムを実施していくなかで修正や改善を加え、さらに充実したプログラムになるようにしています。

「一般来館児活動」の場とは、こうした実験的な試みができる場であり、子どもと造形のかかわりを多角的に観察したうえで、どこでも、だれでもが実践できるように“プログラム化”していく場でもあるのです。

よりよい造形体験を生み出すために

“大きなテーマ”のもとで、子どもたちのよりよい造形体験が可能かどうかというところから考えます。素材に基本を置いて考える「素材との出会い展」、造形と周辺領域を結びつけて考える「造形発見展」、素材と道具と技法の相関関係に重点を置いた「オープンスタジオ」——この3

つの「ワークショップ」をとおして“大きなテーマ”を展開することで、造形スタジオを運営しています。

■素材との出会い展■

〈素材〉が、子どもの造形活動には欠かせない要素のひとつであるということは、言うまでもありません。“紙”“木”“金属”“布”“石”などの造形材料を〈素材〉ととらえています。子どもたちが素材とどのように出会い、かかわり、何を感じるのかという、〈素材〉との“新しい出会い”そのものを大切にしています。〈素材〉と出会った後にも、それぞれにかかわりを展開していけるようにしています。

視覚、触覚、聴覚などの五感を働かせて、子どもたちが自分の手や心でものを感じ、〈素材〉の持つ微妙な様子や特質に出会い、すなおに興味を持ち、子どもたちの好奇心と意欲を刺激するために、〈素材〉を中心にしたワークショップ「素材との出会い展」を定期的に開催しています。

人によっては、〈素材〉に触るだけで、直感的にそのものが持つ性質と心地よく同化してしまうことがあります。小さな子どもに限らず、大人でさえも、そのような感覚を生まれながらに持っている人もいます。〈素材〉とじっくり向き合うワークショップです。

□素材との出会い展□「紙と造形パート1」(85年)、「紙と造形パート2」(86年)、「紙と造形～造形通りに春がきた」(87年)、「木と造形パート1」(88年)、「木と造形パート2」(89年)、「木と造形パート3」(90年)、「土と造形パート1」(92年)、「土と造形パート2」(93年)、「土と造形パート3」(96年)、「金属と造形」(97年)、「竹と造形」(99年)、「竹と造形2000～パンパー革命」(00年)、「布と造形1」(04年)、「布と造形2」(05年)、「紙と造形～ペーパーマーケット」(12年)

■造形発見展■

〈素材〉や〈技法〉の面からばかり造形を追求していくと、造形領域全般への視野が狭くなりがちです。幼い子どもたちにとっては、自分を取り巻くほとんどすべてのものが不思議なもので興味の対象であり、積極的な探索行為と手応えのある遊戯性のある発見へとつながっていくのです。つまり、造形とはあまりかかわりのないと思われた分野、造形素材として成り立ちづらいと思われるものから、造形を捉えようとする試みなのです。

テーマとして取り上げるものは、無限に存在します。美術や造形が常に新たな時代を展開するためには、未知なものと出会い、それを異質なものとせずに取り組みダイナミズムやバイタリティが必要です。従来の造形というイメージから離れて、少し異なったものや現象とのかかわりが、より一層、造形への意欲を呼び起こすのです。

□造形発見展□「音と造形1」(86年)、「音と造形2」(87年)、「光と造形'88」(88年)、「光と造形'89」(89年)、「絵本と造形～ムナーリさんからのプレゼント」(90年)、「造形宝島」(94年)、「ひかりとあそぼう～ひかりくんの大冒険」(98年)、「建築と造形1」(02年)、「建築と造形2」(03年)、「アートと造形1」(06年)、「アートと造形2」(07年)、「道と造形」(11年)

■オープンスタジオ■

造形スタジオを訪れた子どもたちが、材料と道具とその技術のかかわりを体験できる、開かれた(オープンな)スタジオです。“紙”“木”“金属”“粘土”“布”“樹脂”などの〈素材〉を用い、それぞれに合った道具を使い、手を加え、加工し、変化させる〈技法〉(手法)を体験ながら制作します。

小さい子どもでも理解できるように、“ロボット”“動物”“食べ物”などのように、テーマを明確にして活動しています。大人の場合は、「スタジオ」「アトリエ」という言葉は、まさに制作工房を意味し、自発的な活動、制作の場となりますが、小さな子どもには配慮が必要です。テーマを設け

ることで、〈素材〉や〈技法〉を比較して体験することができるのです。

□オープンスタジオ□「春休みオープンスタジオ」(86年)、「造形ファクトリー」(87年)、「造形ジャングル」(88年)、「かお」(89年)、「やってみよう!つくってみよう!」(90年)、「おじいさんの道具箱パート1」(91年)、「おじいさんの道具箱パート2」(92年)、「こんなかおがおもしろい」(93年)、「造形動物園」(96年)、「造形実験室～パイプってなんだ?」(97年)、「すみかと造形」(01年)、「からくりと造形」(08年)、「造形菜園」(09年)、「造形アニマルパラダイス」(10年)

■こども歳時記■

「素材との出会い展」「造形発想展」「オープンスタジオ」のほかに、季節行事にあらわれる共通のイメージや感情を造形活動に取り入れた「こども歳時記」を開催しています。

年中行事は子どもたちの日々の生活にとって、一つの節目となっています。社会の変化にともない季節行事の持つ意味が失われがちになり、商業化もすすみ表層的なイベントとなりつつあります。造形活動は、個の表現活動に終始しがちですが、時代を超えた伝統文化の継承、価値の受け渡しとして、大人も子どもも共有できる“季節行事”をテーマにした活動もしています。

□こども歳時記□「お正月」「節分」「桃の節句」「端午の節句」「七夕」「クリスマス」を実施。

●こどもクリエイティブクラブ

一般来館児を対象にした活動のほかに、1年間、決まった曜日、時間に登録メンバーが継続した活動を行う定員制の「こどもクリエイティブクラブ」があります。コースによって異なりますが、1回の活動時間は1～2時間。一般来館児活動では扱いづらい材料や道具を体験したり、数週間かけてじっくりと完成させるような活動を行っています。金属、粘土、そして絵本、映像などさまざまな素材やテーマでコースを分けたものから、幼児の親子で楽しい造形体験できるものまで、さまざまな活動を行っています。それぞれのクラブも年度でテーマや設定が変わります。

●グループ活動

幼稚園、保育所、小学校、特別支援学校、自主保育グループなどの団体・グループを対象にした、平日の午前中に行っている活動です。事前に打ち合わせをし、日程やプログラム内容などを決めています。

現在は、ブレインボードを使って光と影の関係を体験的に学びながら造形活動する「かげをうつそう」、イタリアの造形作家ブルーノ・ムナーリの優れた自然観察から生まれた造形ワークショップ「木をつくろう」、みんなでジャングルに行くというストーリーのなかで粘土の可塑性と道具・技法を体験的に学ぶ「粘土のジャングル旅行」、〈素材との出会い展～竹と造形〉をコンパクトにまとめて、竹の特性である“筒状”“しなる”“かたい”などを体験しながら竹のおもちゃを制作していく「竹体験」など、対象年齢や人数に合わせたいくつかのプログラムがあります。

プログラムは、グループで一つのものを作り上げていくものや、子ども同士の日常の活動をふまえて協力して生まれるもの、同時に同じ造形体験をすることから団体としての共有感覚を持てるものなど、それぞれに特徴のあるプログラムになっています。

事前の打ち合わせでは、子どもたちの年齢や日常活動に合わせ、セミオーダー的にプログラムを再構成し、変化させて実施しています。